

# 講演タイトル：CHOP 療法施行患者における発熱性好中球減少症の発症に影響する因子 探索

抗がん剤の副作用発症の可能性を予知する！～治療前に副作用が起こりやすい人がわかる～

日本大薬

○中嶋亮介、濃沼政美、中村 均

国立がんセンター東病院薬

市田泰彦、遠藤一司

悪性リンパ腫の中で非ホジキンリンパ腫の薬による治療には、主としてシクロホスファミド、ドキソルビシン、ビンクリスチン、プレドニゾロンを併用する療法が用いられています(CHOP 療法といいます)。しかし、この治療中に副作用の一つである、発熱性好中球減少症(FN と略します)が発症することがあります。FN は抗がん剤の使用で、免疫力が落ちている時に細菌感染等で発熱を伴う症状で、最悪の場合は死に至る副作用です。FN が発症すると治療の中断や薬剤の減量が必要となり、治療効果が低下します。そこで、FN 発症に影響する因子を探し出し、FN 発症の可能性を予知し、早めに対応することが極めて重要となります。

私たちは、CHOP 療法を受けた患者さんの性別や年齢、治療開始直前の臨床検査値、使用薬剤等のデータを統計的手法で解析し、FN 発症に影響する因子を探し出しました。そして、これらの因子を用いて FN が発症しやすい患者さんの予測式を作成し、その妥当性を評価しました。

予測式は 80%以上の確率で治療開始前に発熱するか否かを識別することができました。この予測式を用いることで、より安全で効果的な CHOP 療法が行われると期待しています。